



Title	[書評] 杉原四郎著 『日本の経済思想史』
Author(s)	上久保, 敏
Citation	関西大学経済論集, 52(1): 81-88
Issue Date	2002-06-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/4510
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

書 評

杉原四郎著 『日本の経済思想史』

上 久 保 敏

1. 著者の日本経済思想史研究

本書『日本の経済思想史』は、「日本における経済思想史」（傍点は著者、はしがき1ページ）という意味を込めて編集された、わが国の経済思想史に関する論集である。1990年代に発表されたものを中心に全25点（書き下ろし1点を含む）の論考や紹介等が、研究対象の時代区分にしたがって5部に分けて収録されている。第1部から第4部までが、それぞれ明治、大正、昭和初期、昭和後期の各時代に関する研究であり、第5部が書評と紹介である。著者は本書を前著『日本の経済学史』（関西大学出版部、1992年）の姉妹篇として編集・刊行しており、著者が希望するとおり、両著は併読されるべき内容のものである。

著者は日本の経済学史・経済思想史の分野でこれまで多数の著作を発表し、1960年代以降日本の経済学史研究をリードし続けてきた。雑誌や紀要等に執筆された論考は、『西欧経済学と近代日本』（未来社、1972年）を皮切りに、『近代日本経済思想文献抄』（日本経済評論社、1980年）、『日本経済思想史論集』（未来社、1980年）、『日本の経済思想家たち』（日本経済評論社、1990年）、『日本の経済学史』等の単行本に次々と纏められた¹⁾。

また、一海知義との共著『河上肇 学問と詩』（新評論、1972年）、『河上肇 芸術と人生』（同、1982年）、『河上肇 人と思想』（同、1986年）の河上肇3部作や『ミル・マルクス・河上肇—経済思想史論集—』（ミネルヴァ書房、1985年）、『旅人 河上肇』（岩波書店、1996年）など、河上に関する著書も多く、著者は河上肇研究家として広く知られている。この他、著者は粘り強い文献調査を通じて、明治期から昭和までのわが国の経済雑誌の研究に取り組んでおり、その成果は前述の単行本の他に『日本の経済雑誌』（日本経済評論社、1987年）、『続日本の経済雑誌』（同、1997年）で見ることができる。

こうした著者のこれまでの研究は、経済思想そのものに踏み込んだ研究と、資料探索・文献考証

1) この他、著者には日本の経済思想史分野の編著として、『近代日本の経済思想』（ミネルヴァ書房、1971年）、『日本の経済思想四百年』（逆井孝仁・藤原昭夫・藤井隆至との共編著、日本経済評論社、1990年）があり、日本の経済学の通史を描いた長幸男との共編著『日本経済思想史読本』（東京経済新報社、1979年）がある。また、啓蒙的な著作として、『経済セミナー』への連載を基に福沢諭吉から都留重人までの15名のエコノミストの思想を紹介した列伝風の通史『日本のエコノミスト』（日本評論社、1984年）がある。

的な研究に大きく分けられる。これを内容によって分類すると、①西欧経済学の導入史、②河上肇研究、③経済雑誌研究、④エコノミスト・経済人の評伝、⑤日本経済思想史研究に関するサーベイ・文献紹介に整理できる。今回上梓された『日本の経済思想史』もこれらの研究を全て含んでいる。大雑把に言えば、第1部には①や③に関する論考が集められ、第2部は②の比重が高い。第3部は④が中心となっており、第4部は⑤を扱った論考が収められている。第5部では②、③をテーマとする紹介がみられる。

2. 本書の特徴

このように本書は著者のこれまでの著作の続編と位置づけられるが、一方で前述の諸著作と比べると次のような特徴が浮かび上がる。

まず、第1に挙げられるのは福田徳三への強い関心である。著者の既刊著の人名索引を見れば明らかなおと、河上には及ばぬものの、これまでも福田は言及頻度の点で他の経済学者を圧倒的に上回っていた。しかし、福田を中心に置いて論じた論考は意外に少なかった²⁾。今回は河上を上置きにしながら、福田に直接スポットライトを当て、彼の名をタイトルに入れた論考が3点収められているのが目を引く。同時代のライバルとして注目される河上と福田だが、わが国の研究動向としては、河上に関する研究が膨大な数にのぼるのに対して、福田に関する研究は相対的にかなり少なかった。こうした偏りへの反省と「福田ブーム」とも言える最近の日本経済思想史研究における福田再評価の高まりが、著者の福田への関心を一層強いものにしたと推測される。

著者の日本経済思想史への関心は京都帝大の学生時代に受講した本庄栄治郎の講義に由来する³⁾が、本書には著者自身の日本経済思想史の研究回顧が盛り込まれている。第4部所収の書き下ろし「杉原四郎『日本のエコノミスト』に寄せて」で、著者のこの分野における研究歴が簡単に振り返られている他、本書の随所でこれまでの自らの研究を回顧する著者の視線が感じられる。それとともに、日本経済思想史研究の現時点までの到達状況をサーベイする記述も目に付く。これが本書の持つ2つめの特徴である。

この2番目の特徴とも密接に関連するが、本書のもう1つの特徴として、著者の現在への意識がこれまでの著作以上に強く出ていることを指摘しておきたい。例えば、第2部所収の「福田・河上

2) 本書98ページで追記しているように、著者は『日本の経済思想家たち』所収の「近代日本の社会思想」で福田の社会政策論について詳述している。しかし、管見の限りでは、題名に福田徳三の名前が入った著者の論考は、本書140ページで追記している「河上肇と福田徳三」(初出は『経済論叢』、第124巻第5・6号、1979年2月。『河上肇 芸術と人生』に収録)と『日本のエコノミスト』収録の「福田徳三」以外は見あたらない。

3) 本庄栄治郎の講義から受けた影響はよほど大きかったのか、この点について、著者はこれまで著作の中で何度も触れている(例えば、『西欧経済学と近代日本』や『日本の経済思想家たち』の「はしがき」を見よ)。本書にも「一九三九～四一年の京都大学経済学部在学中に新設された「日本経済思想史」(本庄)と「東亜経済思想史」を聴講してこの分野に興味を持った」(244ページ)との記述がある。

問題研究序説」では福田・河上論争の再検討を通じて、福田・河上問題の現代的意義が考察されている。歴史的研究だけにとどまらない、学説の検討を通じた現在への強い意識が行間から読み取れる。また、第4部所収の「五〇年前と現在」は50年前と現在の比較をしながら、その共通点と相違点を指摘している。「いま、経済と社会を考える」という副題が示すとおり、ここでは現在の経済と社会が抱えている問題とそれに対する経済学の在り方が触れられており、著者が経済学史家・経済思想史家である以前に経済学者であることを読者に再認識させる。

こうした本書の持つ特徴を念頭に置きながら、以下順を追って、本書の内容をみていくことにしよう。

3. 『日本の経済思想史』の内容

(1) 第1部 ～明治時代の雑誌研究と浜田健次郎に焦点

明治時代を対象とする第1部には、『東京経済雑誌』や『東洋経済新報』等の経済雑誌やこの時代に活躍した経済評論家浜田健次郎に焦点を当てた論考5点が収められている。日本の経済雑誌に関する研究は学生時代より経済雑誌に関心を持っていた著者が1966年に手を付けて、開拓した分野であり、著者の日本経済思想史研究の中で重要な位置を占めている⁴⁾。

「田口卯吉と『東京経済雑誌』」は、田口と『東京経済雑誌』の関係を「田口を日本経済思想史のなかでとらえ、『東経誌』を日本経済雑誌史のなかでとらえるという角度から照射」（10ページ）した論文である。また、「『東洋経済新報』の二特質」は、『東京経済雑誌』よりも一般雑誌的色彩の強い『東洋経済新報』が、①東洋重視の姿勢と②実用的な記事を強化する一方で、思想的な評論と客観的な情報とのバランス良い提供を行った、2つの特質を持っていることを明らかにしている。

「浜田健次郎と東京商業学校」では、東京商業学校設立の中心となった浜田が講義と講義録の発行を通じて西欧経済学の導入・普及に果たした役割が紹介される。「『出版月評』と浜田健次郎」は、わが国の書評誌の草分けとも言える『出版月評』に着目し、本誌における浜田の書評をいくつか取り上げて考察している。特に、土子金四郎の『経済学大意』（1987年）の書評をめぐって交わされた浜田と土子の論争は興味深い。所望・労力と価格に関する両者の論争は、「価値（value）と価格（price）の関係にまで議論が深ま」（64ページ）ることなく打ち切られたとはいえ、著者が述べているとおり、明治20～22年頃に「経済学上の大問題」を巡って交わされた熱い論争だからである。

文部省（現文部科学省）の科学研究費による特定研究「明治・大正・昭和における日本近代化の研究」が1966年度から69年度まで人文・社会科学分野の学際的研究として行われた。第1部の最後

4) 著者の雑誌との出会いや経済思想史研究における雑誌を重視する見解については、「思想史研究と雑誌」（杉原四郎『経済学と経済学者』、日本経済評論社、1985年）を参照せよ。また、著者は「古書店の思い出」（初出は『萬巻』、4号、大阪古書研究会、1999年。高橋輝次編『古本漁りの魅惑』、東京書籍、2000年、に収録）の中で、学生時代からの古書店巡りの楽しみとして古書店での雑誌の発掘を挙げ、「学生時代からはじまった私の雑誌研究は、昔も今も—今は送られてくる目録で注文するのだが—古書店が主な資料源である」と結んでいる。

に取められた「経済学の導入過程における諸問題」は、この研究プロジェクトの「社会経済思想の発展より見た日本の近代化」研究班⁵⁾を代表して、1968年度に開催された合同研究会で著者が行った報告の要旨である。30年以上前の報告要旨が今回収録されたのは、「1860年代から1880年代に至る約30年間のわが国への西欧経済学の導入過程を、従来比較的省みられなかった諸側面に力点を置いて概観」(65ページ)したことの意義の大きさからであろう。同時にこれは、この特定研究について詳しく言及した本書第3部所収の「堀経夫と日本経済思想史研究」及び第4部所収の「日本経済思想史研究のこれまでと今」への伏線となっている。

(2) 第2部 ～大正期における河上肇と福田徳三の研究

第2部は大正時代の河上肇と福田徳三に着目し、京都帝大経済学部で行った河上の講義に関する文献考証的な紹介2点と河上・福田に関する3つの論考から成る。

「大正中期の河上肇の『分配論』講義」は、河上が1918年9月から1919年6月まで行った「分配論(経済原論上の特殊問題)」の講義ノート中の「第2章 生産力の分配」を全文紹介している。著者が言うとおりに、『貧乏物語』(1917年)と『近世経済思想史論』(1920年)との中間に当たる時期に、河上がどのような資本主義観を持っていたかという重要なポイントがこの資料により明らかになる。著者は、河上のマルクス研究と関連づけてこの講義ノートの解題をあとがきとして書き、紹介を結んでいる。

「河上肇の一九二二年度経済学史講義」は京都帝大経済学部で1922年度に河上が行った経済学史の講義ノートの紹介である。ノートの筆記者は「河上の『近世経済思想史論』(1920年)を読んで強く感銘し、河上のもとで経済学を学ぶべく1920年に京大に入学した」(21ページ) 蛭川虎三である。著者はこれまで河上の1926年度の経済学史講義ノートを校訂して河上肇『経済学史講義』(大月書店、1973年)を刊行し、河上執筆の1924年度の経済学史講義ノートを1974年に『甲南経済学論集』第14巻第4号で紹介して、その後『日本経済思想史論集』に収録した。今回の蛭川による筆記ノートに基づく1922年度経済学史講義の内容紹介では、多年にわたる河上の経済学史講義の中で、この年度の講義がJ・S・ミルに対して最も高い地位を与えたものであることや修正主義、ヒルファーディング、ローザ・ルクセンブルクなど、マルクス以降の社会主義についての簡単な言及があることが、特徴として指摘されている。

著者の河上との出会いはマルクス研究の中で起こった⁶⁾が、最近では河上との関連でその好敵手福田徳三への関心が一層強まったようである。今回本書に取められた福田に関する3篇はここ1、2

5) 杉原四郎編『近代日本の経済思想—古典派経済学の導入過程を中心として—』(1971年)は、この研究成果をまとめたものである。

6) 著者の河上肇との出会いについては「ミル・マルクス・河上肇—私の研究回顧—」(初出は『甲南経済学論集』、第26巻第1号、1985年6月。『ミル・マルクス・河上肇—経済思想史論集—』、ミネルヴァ書房、1985年、に収録)が詳しい。

年のうちに発表されたものばかりである。

「大正時代に「生存権」を唱えた福田徳三」は福田が「金井教授在職二五年記念 最近社会政策」(1916年)に寄せた「生存権の社会政策」(『生存権の社会政策』、講談社学術文庫、1980年、に収録)を中心にして、「生存権」を中核とする彼の社会政策論を詳しく検討した論考である。福田の「生存権の社会政策」は社会政策に哲学が欠如しているという問題意識に立って書かれた論文だが、福田はこれを河上による批判への答弁として書いた。著者は福田の論点を要領よく整理しながら、最後に「河上も福田も、イギリス自由主義の制度的・思想的伝統を尊重する点で共通しているが、ロシア革命への対応の違いや、アカデミックな経済学に対する対応の違いから最終的に「二人の間に再び学問的な交流と相互批判とが回復する機会はなかった」とし、「だが、マルクスやエンゲルスの思想には生存権を承認する余地はないのだろうか」(98ページ)と反語の形で疑問を呈している。

この第2部所収の論考の中では、河上を通して見たその論敵福田の思想的立場が鮮明になる「河上肇と福田徳三」も示唆的だが、それ以上に注目されるのは「福田・河上問題研究序説」である。著者はこの論考の中で、河上対福田という対立の構図で両者を捉えない。むしろ、両者の重要な共通点として、2人が「経済学という学問を近代日本にどのように根づかせ、日本の発展にどう貢献させるべきかを、研究と教育の両面で、さらに具体的にどのような制度で実現してゆくかを自ら考究・実践した」(72～73ページ)ことを指摘し、福田・河上論争を再検討した上で、1920～30年代までの両者の活動を振り返っている。そして、福田・河上問題の根本にある問題として最後に「イデオロギーと政治的立場の対立はそれとしても、研究者として共に相手を認めつつ討議を重ねてゆくことが大正デモクラシー期のわが国で、どうしてできなくなったのだろうか」(85～86ページ)と疑問を投げかける。著者が提示したこの福田・河上問題は大きい。「現代の社会科学者にとって究明すべき」この問題に答えるには、当時の学問状況とそれを取り巻く時代環境、人文・社会科学分野で研究を続けていた当時の諸学者の意識等を視野に入れた壮大な研究が必要であろう。

本書で示された福田に関する著者の見解に対して、評者に異論はない。福田と河上の対立点だけに目を向けずに、その共通点を抽出する読み方は示唆に富んでいる。ただ、河上との対比という視点に囚われないとすれば、日本経済学史の中での福田像はどのように描かれるだろうか。福田は、中山伊知郎、高田保馬、安井琢磨等につながっていくわが国における「純粋経済学」研究の鼻祖として、重要な役割を果たしただけでなく、門下に大熊信行、赤松要、宮田喜代蔵等を輩出して「十五年戦争」期に台頭した「政治経済学」にも思想的影響を与えた。福田は日本におけるノン・マルクス経済学の源流である。

(3) 第3部 ～飯島幡司と平生夙三郎の歩みを追う

昭和初期の研究を集めた第3部は4稿から成る。「飯島幡司の経済思想」は1983年に『エコノミスト』誌上で行われた著者と飯島との対談である。飯島の処女作『社会問題の根本観念』(1912年)がやや詳細に論及される以外は、彼の経済思想の紹介は簡単なものにとどまる。むしろ、神戸高商

から東京高商専攻部に進学し、卒業後神戸高商の教授になるも、津村秀松に請われて実業界に転身した飯島の歩んだ道が対談の中心である⁷⁾。恩師福田徳三や津村、神戸高商校長水島鍬也、学界から転身して大阪市長になった関一に関する飯島の回顧談が、当時の東京高商や神戸高商の雰囲気をよく伝えている。

著者は既に『日本の経済思想家たち』所収の論文の中で平生釦三郎の経済思想を紹介してきたが、第3部には平生に関する論考が2点ある。平生の日記の一節を解説して、1928年における平生の活動から自由通商協会関係の活動と彼の教育改革問題への取り組みに焦点を当てた「一九二八年の平生釦三郎」と平生の人脈形成を紹介する「平生釦三郎と彼をめぐる人々」である。経済学者だけでなく、飯島や平生のような財界人の経済思想にも目を向けるのは、著者の経済思想史研究の特長の1つである。

第3部の最後に収められた「堀経夫と日本経済思想史研究」は堀経夫が欧米の経済学史・経済思想史だけでなく、日本の経済思想史の研究に向かった経緯と背景を彼の主著『明治経済学史』(1935年)や『日本経済学史』(1941年)を中心に考察して、日本経済思想史研究史上の堀の位置づけを的確に行っている。なお、本書第4部所収の「日本経済思想史研究のこれまでと今」でも言及されているが、昭和になって明治以降の日本経済思想史研究の端緒となったのは三橋猛雄である。経済学者ではない古本屋の店主三橋が日本の経済思想史研究史上に残した貢献はこれまで比較的注目されてこなかったが、今後もっと研究される必要があろう⁸⁾。

7) 評者は『経済セミナー』2000年6月号所収の連載シリーズ「再発掘 日本のノン・マルクス経済学」(PART III)で飯島幡司を取り上げた。飯島に関する資料は少なく、この対談(掲載誌の日付が、本書307ページの初出一覧では、誤植により1985年8月30日と記されているが、正しくは1983年8月30日である)は貴重である。著者が本書で挙げていない飯島に関する資料としては、関西経済連合会発行『経済人』第49巻(1995年7月号)所収の有光弘和「飯島幡司(二代会長) 学界との交流を拓く」(シリーズ「未来はここに―関経連・先人の足跡<第3回>―」、後に有光著「未来はここに 関経連・先人の足跡」関西経済連合会、1996年、に収録)がある。

8) 本書242ページで紹介されている三橋猛雄「明治経済思想史資料解題―泰西経済学移入に関する文献―」(『文献』1928~29年)は三橋の『雑文集 古本と古本屋』(日本古書通信社、1986年)に収録されている。『文献』は三橋が発行した古書販売目録を兼ねた雑誌であった。『雑文集 古本と古本屋』には三橋が『日本古書通信』等に執筆した「明治初期のベストセラー」、「明治前期の女性観・婦人論」などの興味深い論考も収録されている。三橋は『明治前期思想史文献』(明治堂書店(=三橋が経営した古本屋)、1976年)の編集・発行で知られるが、この浩瀚な労作の資料的価値については杉原「近代日本経済思想文献抄」106ページの注23で簡単に触れられている。また、住谷悦治は『日本経済学史の一餉』(大畑書店、1934年)25~26ページ、『日本経済学史』(ミネルヴァ書房、1958年)57ページで三橋が『文献』第3号で行った神田孝平訳「農商弁」と『経済小学』の解題における推測を評価している。なお、三橋の評伝としては青木正美「信念を貫き通した人―明治堂書店主・三橋猛雄」(青木「古本屋奇人伝」、東京堂出版、1993年、所収)がある。三橋が収集した明治前期思想史に関する文献は、1932年に土屋喬雄の懇請により東京帝大経済学部研究室に一括納入(約930点)されたが、その後三橋が集書した数千点にのぼる明治前期の刊行物は「三橋文庫」として三橋の母校大倉商業学校の後身である東京経済大学図書館に収められた(『東京経済大学創立90周年記念 図書館所蔵 三橋文庫目録』、1990年10月、参照)。

(4) 第4部・第5部 ～日本経済思想史研究を振り返る

第4部に収められているのは昭和後期に関連する5つの研究成果であり、ここではこれまでの日本経済思想史研究の流れとともに著者自身の研究歴が辿られる。

創立20周年の年に京大経済学部に入学者は「京都大学経済学部創立二十周年の頃」で祝賀晩餐会や当時の京大の雰囲気語っている。1943年頃から『経済論叢』のページ数が薄くなっていったことや、1941年2月刊行の『東亜経済論叢』が44年末で廃刊となったことなど、京大発行の雑誌に関する情報が有益である。

小宮山量平『戦後精神のゆくえ』(1996年)を紹介した「小宮山量平 戦後精神のゆくえ—季刊『理論』とその前後を語る」では、戦後の代表的な経済雑誌の一つである『季刊理論』の変遷がよくわかる。

「日本経済思想史研究のこれまでと今」は、自らの研究歴を振り返る「杉原四郎『日本のエコノミスト』に寄せて」と併読されるべき好論文である。2000年11月の『経済学史学会年報』(第38号)の特集「私の経済学史研究—20世紀の学史研究をふりかえって」に寄稿されたこの論文は、日本経済思想史研究に関するサーベイ論文である。著者は20年余り前にも、日本経済思想史研究の歩みや現状に関する論考を発表している⁹⁾。今回は、日本経済学史・日本経済思想史に関する経済学史学会における諸報告と研究論文が、限られた紙幅の中で精力的に紹介される。日本経済思想史研究の到達状況を示す適切な案内である。この他、第4部には先に述べた「五〇年前と現在」が収められている。

第5部は松野尾裕「田口卯吉と経済学協会—啓蒙時代の経済学—」(1996年)、戒田郁夫「欧米財政学・経済学導入史上の忘れられた人々」(1996年)、藤井隆至編『経済思想』(1998年)、経済学史学会編『経済思想史辞典』(2000年)の4つの書評と「『サラリーマン』と『自由思想』」、「最近の河上肇関連文献」の2点の紹介である。書評はすべて著者・編者の問題意識を十分に汲み取った上で、時に的確な補足説明がなされ、文献紹介では著者の見解を交えた丁寧な資料探索への取り組みがうかがえる。この第5部は本書の著者の学風をよく伝えている。

4. むすびにかえて

本書の25点全てに目を通すと、丹念な資料調査と深い学識に裏打ちされた著者の研究姿勢だけでなく、日本経済学史・日本経済思想史の研究に取り組む同学の者達への暖かい視線とこの分野での研究成果が上がることへの熱い期待が随所で感じられる。人名索引をとってみても、「思想家に限らず、友人・家族など思想家をめぐる人々をふくめ、登場する人物はすべて採用した」(索引凡例(4)巻末iページ)人名数は、日本人647人、外国人188人に達する。経済雑誌索引は、延べ

9) 杉原四郎「日本経済思想史研究の現況」(初出は『経済評論』、1979年1月号。「近代日本経済思想文献抄」に収録)。

172の経済雑誌を拾っている。『思想家の書誌—研究ノート—』（日外アソシエーツ、1990年）という著作もあり、書誌学にも通じた著者の後学の者への行き届いた配慮がうかがえる。本書『日本の経済思想史』そのものが大きな資料的価値を有しているのである。

著者の研究は、前述したとおり、古典派・マルクス経済学を中心とする西欧経済学の導入史と河上肇や経済雑誌の調査研究に向けられるところが大きく、わが国のノン・マルクス経済学史とりわけ「十五年戦争」期のいわゆる「政治経済学」の潮流¹⁰⁾については相対的にあまり手が付けられていない。もちろん、これは本書の欠陥ではない。むしろ、これまでに著者が築いた業績を手掛かりにして、若い世代の研究者が取り組んでいかなければならない、日本経済学史・日本経済思想史研究に残された大きな課題である。

10) わが国における戦前の「政治経済学」を詳しく検討した論考としては、本書249ページで紹介されている早坂忠「戦時期の経済学」（経済学史学会編『日本の経済学』、東洋経済新報社、1984年、所収）がある。また、中尾訓生「日本経済学とは何か」（初出は『山口経済学雑誌』、第45巻5・6号、1996年3月。中尾『日本戦時思想の研究—日本精神と東亜協同体—』、恒星社厚生閣、2001年、に収録）は、作田荘一や石川興二、難波田春夫、柴田敬、谷口吉彦の諸説を取り上げながら、戦後無視されることが多かった戦時期の政治経済学的動向の一潮流である「日本経済学」の性格や構造を分析している。評者は、杉原『日本の経済思想史』252ページで言及されている経済学史学会での報告「『十五年戦争』期政治経済学の再考—純粹経済学との距離でみた政治経済学の3つの類型—」（報告要旨は『経済学史学会大会報告集』（第63回全国大会）、1999年9月、94～99ページ、に所収）の他、「終戦時までのわが国ノン・マルクス経済学史の素描—「純粹経済学」と「政治経済学」—」（『大阪工業大学紀要』（人文社会篇）、第46巻第1号、2001年10月）で「政治経済学」について考察したが、錯綜する当時の「政治経済学」を巡る学問状況をなお十分に整理し切れていない。

（関西大学出版部、2001年10月、A 5 版、308 + X VII ページ）